

ま と め

平成23年から7年間継続した灰塚山古墳の発掘調査で、灰塚山古墳が全長61mを越える大型前方後円墳であること、後円部には二つの棺が埋納されていたこと、古墳が古墳時代中期に築かれていたことなどがわかりました。

1、古墳の規模、特徴

古墳時代中期の古墳は東北地方全体でも比較的少なく、会津盆地では大型の中期古墳は知られていませんでした。灰塚山古墳が中期古墳と判明したことはこれまでの会津盆地の古墳時代の動向を考える上でまったく新しい発見といえます。これまで、会津盆地では古墳時代前期には大型古墳が多数築造されるが、中期には大型古墳はないと考えられてきました。私は中期には会津盆地は大和王権から離脱したのではないかと考えてきました。灰塚山古墳の調査成果はこれまでの理解を覆すものです。私もこれまでの考え方を変え新たな会津盆地の歴史像を考えなければなりません。

灰塚山古墳はの規模は東北地方の中期古墳の中では宮城県名取大塚山古墳、兜塚古墳について3番目にあたります。福島県内では近い規模が推定されている古墳もありますが、まず最大といってもいいでしょう。

古墳の姿、形は名取大塚山古墳、兜塚古墳などとは大きく違い前期の特徴を残していません。東北地方でこれまで知られている中期古墳とは違う系譜を考えなければならないと思います。

2、棺と出土遺物

後円部頂上から対称的な二つの棺が発見されました。

第1主体部の長大な木棺は古墳の中心軸上にあり、この古墳の主が埋葬されたと考えられます。全長8mを越え南北端が傾斜し、幅1.6mを測るこの組み合わせ式木棺と同様の例は今のところ他に探せていません。きわめて珍しい例です。副葬品には大刀を除いて武器武具はいっさいありません。これまでの例で見ると女性である可能性がありそうです。また、出土した堅櫛群は遺体に供献されたものです。このような例は今のところ他で確認できません。出土堅櫛群は、遺体に供献したことを示す例です。保存状態も良く、日本全体で最も良好な例で、きわめて貴重です。

第2主体部の石棺は粘土で密封され、石組み遺構で覆われた特徴的な構造をもっています。蓋石上で発見された沢山の武器、武具は死者に供献された例として貴重です。また、灰塚山古墳の主はこのような豊富な鉄製品を入手できる立場にあったことを物語ります。大和王権中枢との関係を思わせます。また、石棺の蓋石の上と棺内からほぼ武器だけが出土しました。このようなあり方は考古学の立場から男性の被葬者を考えさせます。後で述べるように人骨からも男性の可能性が考えられますので、第2主体部には男性が葬られていたのでしょうか。第1主体部に埋葬された女性とともに会津盆地の中心勢力を率いていたのだと思います。第2主体部は5世紀後半の時期だと考えられます。灰塚山古墳の南東1.6kmにある豪族居館古屋敷遺跡はまさに5世紀後半に営まれていますので、第2主体部に埋葬された男性は古屋敷遺跡に住んで人々を統率していたのだと考えられます。